青園謙三郎著

天龍寺と芭蕉

本書の前半の「芭蕉の足跡」は、昭和五四年四月一五日から一か月間「日刊福井」に「芭蕉のころ」という表題で連載されたものである。また後半の「天龍寺略史」は、松岡藩の初代藩主松平昌勝によって建立された由緒ある寺院で、さらに著者の祖父が天龍寺一六代住職でもあり、その点から著者が長年にわたり同寺の関係史料を丹念に調査、研究して仕上げた労作だともいえる。そこで芭蕉が「奥の細道」の帰途、越前に入国した初日に同寺で一泊したため、書名のとおり一本にまとめたのははなはだ興味ぶかいところである。

周知のとおり青園氏は史学専攻者だけあって、寺史の研究視角においても、例えば明治初年の段階では、全国的な廃仏毀釈の社会的背景をしっかりふまえるなどきわめて学問的であり、さらに同寺の関連史料をできるだけ掲載するが、その精密でかつ考証的な著述態度とともに、寺史編さんの新機軸を打ち出したものとして高く評価したい。

（フェニックス出版、一八四ページ、一、二〇〇円）

〔以上の各書紹介は三上記〕